

高校生・大学生のための国際キャリア入門

Chapter14 外交官や公務員として国際問題に取り組む：それぞれの体験談3

本章では第12章・第13章に引き続いて、『グローバルキャリアのすすめ～プロフェッショナル講義～』から外交官や公務員出身の先生方のキャリアについて、紹介しましょう。

まず、井上一郎先生から外務省入省までをうかがいます。

外交官としてのキャリアアップ（井上一郎先生；関西学院大学総合政策学部）

大学から外務省を目指す

大学3年になって、そろそろ自分の将来のことを考えはじめた際に、やはり**海外とつながりのある仕事**がしたい、できれば、外国にも住んでみたいという思いがありました。（中略）**外務省**を目指したのは、何も日本の国益のために貢献したい、という大上段に構えた崇高な思いからではありませんでした。それどころか、もっと低次元の話で、要するに**公務員試験**を突破して外務省に入省することができれば、国費で2年間、語学研修という名目で海外留学ができるということを知ったからです。まことに志の低いことです。

振り返ってみれば、あの当時、仮に今日のように簡単に海外留学が実現できていたのであれば、「外務省に入れば国費で2年間留学できるので、がんばって試験準備をしよう」といったような、強い思いは生まれてこなかったかもしれません。情報やチャンスが多すぎるのも善し悪しで、当時は、情報が少なかったので、かえって自分で勝手に想像をたくましくして、それをエネルギーに変えることができたということがいえます。

勉強の準備は、これまた今日のような公務員試験用のスクールはそれほど一般的ではなかったので、志を同じくするゼミの同級生と勉強会を組んでやりました。関学は伝統的にはどちらかという民間指向が強く、公務員試験や資格試験の勉強を地味にシコシコとやるといった校風ではなく、こうした分野への就職実績は民間に比べればそれほど多くはありませんでした。こんなことしているけれど、本当に関学から外務省なんかにかかるとか友人とささやき会いながら公務員の試験勉強をやっていました。はたして、4年次の試験の結果は全滅で、外務省に入るためには、当時は、**外務公務員上級職試験**（いまの**国家公務員総合職試験**）と**外務公務員専門職試験**があるのですが、両方受けて、ともにあえなく討ち死にでした。

いまから思えば、まったくもって人生の危機管理というものが出来ておらず、試験に落ちた場合のことをほとんど考えず民間企業への就職活動は全く行っていませんでした。ただ、あまり深く考えずに法学部のほかの学生もしばしば受けるからという理由だけで地元の県庁の公務員試験を一つだけ受けており、そちらの方からは合格通知をもらっていました。但し、将来は海外に飛び出したいと思っていた人間が、自分の地元に戻って地域に密着した地方公務員の仕事をするとするのは、まったくもって人生のベクトルが逆で、自分にとっては思いもかけない不本意な人生の展開となりました。しかしながら実際に現場で働き出してみれば、そこにはそこでのやりがいも感じ、ズッとこのままここにいるのかな、という気持ちも芽生えだしていました。

その後、少し仕事にも慣れた2年目にもう一度外務省の試験を受けて、今度は幸運にも合格した次第です。仕事をしながらだったので準備時間も限られ、このときは試験科目の少ない**外務専門職試験**に絞って受けました。このように書くと、苦節何年の難しい試験のように思われますが、それはいまから思えば、私の試験準備の戦略が間違っていたからで、外務専門職試験については、当時は1年間くらい合理的に準備すれば十分合格できる試験といわれていました。実際に私の世代が入省する頃までは、外務省には関学出身者の先輩は本当に少なかったようですが、最近は、入省して活躍されている方々も沢山おられるようなので、関心のある方は是非チャレンジしていただきたいと思います。

“研修語学”を選ぶ：中国語をはじめ

外務省では入省にあたって、海外留学に際しての**研修語学**を何にするか希望を出すことになります。同期の合格者のなかには、外国語系の大学や学部を出て、すでに入省試験の時点で英語ではなく、ポルトガル語やヒンディー語で外国語科目を受けて合格したツワモノもいました。

当時は研修語語については第1希望から第5希望くらいまで出すことができ、もちろん第1希望どおりにならない場合もあります。私の場合、入省試験自体は下手な英語で受けたわけですが、留学先の研修語学としての第1希望については、自分は直感で、それまでまったく勉強したことのない中国語と書きました。英語はもちろん世界の共通語としてこれからも重要だということくらい当時の自分も理解していたつもりです。ただ、英語圏の大

学で研修して、英語ができるようになれば、英語を通じてのみ世界を理解することになりがちです。一方で、世界には英語圏の主流の考え方でない、たとえば、アラブやロシアや中国や中南米の論理というものもあるのではないかと自分なりに考え、もうひとつ外国語を身につけて、複眼的に世界を見れるようになりたいといった思いがありました。

前述のとおりフランス語は第二外国語としてかじったことはありますが、大学1年次に単位を沢山落とした暗い過去と苦い思い出しかなく、ここは心機一転新しい言葉に挑戦、これからはアジアの時代だろう、やるなら中国語だと勝手に思い込みました。現代史を振り返ってみれば当時は冷戦が終わりに向かっている時期だったので、当時に身を置くと、まだまだ米ソの東西対立が続き、そのなかであって、中国は1980年代に入り大胆な改革・開放政策を進めて、今後の国際政治の構造の変化を予感させるものがありました。いまになって思えば、大した根拠もないまま、「これからはアジアの時代でそのなかでも中国が鍵を握るだろう」と思い込んだ自分の直感は、それなりに当たっていたことになりました。結局、外務省へ入省するにあたって中国語を研修言語として選んだのは、その後の自分の人生を大きく左右することになりました。人生というのは自分の行った選択の結果だとよくいわれますが、しかし、それぞれの時点での選択の意味なんてずっと後になってみなければわかりません。

どの外国語を研修語とするかは、もちろんその後のキャリアにとって大きく影響するのですが、後に述べるように、外務省では、必ずしも特定の地域や言語と密接に関連する仕事だけでなく、経済や経済協力、安全保障・軍縮不拡散、条約や国際法、広報や文化交流など機能別の仕事も多くあります。たとえば、フランス語を研修したものの、その後、経済協力関係の仕事が長くなった、あるいは、スペイン語を勉強したのに、その後の軍縮関係が長く、安全保障の専門家になったというようなケースはしばしば見られるのです。但し、私の場合には、かなりいろいろな分野に関わりながらも中国関係の仕事が圧倒的に長くなりました。

外務省での仕事

かくして、この原稿執筆時点から、もうなんとおそろしいことに30年以上前！の1986年に外務省に入省、1年後の1987年から、在外語学研修というかたちで中国上海にある復旦大学に2年間留学、続けて上海の日本総領事館で実務に就くというかたちで、外務省職員としての人生のサイコロがころがりはじめたのでした。

（『グローバルキャリアのすすめ～プロフェッショナル講義～』抜粋・編集）

続いて、坂口先生からは、大学生活から財務省へ、さらに財務省の中でも“国際援助”の世界にどのように進まれたのか、をお聞きしましょう。大学のサークルや職場での“海外”との出会いなど、皆さんにも大いに参考になることでしょう。

財務省から国際援助へ（坂口勝一先生；関西学院大学総合政策学部）

私は大学を卒業してすぐに大蔵省（現在の**財務省**）に入省し、以来35年同省が所管する財政や金融の仕事に携わりました。そしてその間、大蔵省から出向し、**アジア開発銀行**（略称ADB；在マニラ）に通算10年、**国際通貨基金**（略称IMF；在ワシントン）に3年、いずれも本部の職員として勤務する機会を得ました。第5章では財務省やこれらの国際機関で経験したこといくつかをお話したいと思います。

はじめに一学生時代一

いつ頃から「海外」に興味を持つようになったかははっきりしませんが、大学に入学して間もなく、ひょんなことから**アイセック**（AIESEC）というサークルに入り、そのサークルのプログラムでノルウェーに行くことになりました。ノルウェーでは、首都オスロにあるアンドレッセンス銀行という銀行の外為部でインターンをしました。仕事、生活のすべてが新鮮で毎日がワクワクの連続でした。それまで海外とは全く縁がなかった私にとってそれは強烈な体験でした。

そして、日本に帰って来てからは、アイセックに加え**ESS**という英語研究のサークルにも参加することになり、海外の出来事や問題について勉強したり考えたりすることが多くなりました。あまり貢献はできませんでしたが、大学時代のサークル活動のウエイトは大きかったと思います。

いつのまにか「将来国際的な仕事がしたい」と考えるようになっていて、就職先として大蔵省という官庁を選んだのもそうした思いが関係していたと思います。私は今学生諸君に「学生時代にいろんな世界を見ておきなさい」と勧めています。学生時代に多くの経験をして将来の可能性を広げておくことが大切です。

ブラジル国家破産とIMFとの出会い

ブラジルというリオ・オリンピックを思い出す人が多いと思いますが、実は**国家破産**したことがあります。時は1983年にさかのぼります。当時、私は大蔵省国際金融局投資第三課という部署の課長補佐という役職に

いて、日本輸出入銀行（現在の国際協力銀行）の投融资の審査などを担当していました。

8月の終わり頃、1本の電話がアメリカ財務省の高官から国際金融局長に入りました。「ブラジルの資金決済が危なくなっている。来週ニューヨークでG5による支援会合を開催したい」とのことでした。ブラジルがそれまで大量に外国から借り入れてきたドルの返済ができなくなって**デフォルト**（債務不履行）を起こしそうになっているので、米、日、英、仏、西独の主要5か国で支援しようというわけです。早速大蔵省では緊急の会議が開かれ、国際金融局長の佐藤次長がヘッドになって対応することになりました。私は側聞して「大変だな」くらいに思っていたんですが、総務課の企画官（「総務課企画官」というのは課長一歩手前の管理職で局長の右腕。ちなみに、この方は現在某県の知事をしておられます。）に呼び止められ、「本件坂口君に担当してもらうことになったから。来週のニューヨーク出張も次長としっかりやってくれ」と告げられました。今で言う「聞いてない」でした。

1980年代に入り、それまで開発のために外国から大量の借金をしていたメキシコ、ブラジルなど当時の新興市場国やアフリカ諸国が、ドル金利の高騰や政策の失敗などが原因となって、バタバタとデフォルトを起こすという事態が起きました。「累積債務問題」と呼ばれています。1990年代の初めにかけて、国際社会はこの問題の対応に悪戦苦闘することになるわけですが、1983年当時の日本の大蔵省には、まだこの問題に対応する体制がなく、担当部局もありませんでした。どうして私が担当することになったのか後で聞いたら、「一番年次が若い課長補佐だったからじゃないか」ということでした。

さて、少し情報収集してみると、ブラジルは当面の資金繰りに数億ドルの資金が不足しており、アメリカの目論見としては、この不足を5か国が分担して救済しようということのようでした。ニューヨーク出張まで1週間しかありません。ブラジル経済がどんな状況にあるのか、外国からの借金がどれだけあって、これから1週間、1か月、1年の間にどれくらいの額を返済しないといけないのか、そもそもブラジルは輸出からどれくらい外貨を稼いでいて、輸入にどれだけ外貨が必要なのか、外貨準備はどれくらいあるのか等々、詳細なデータや情報を早く集めてG5会議の準備をしなければなりません。しかしそのようなデータは一体どこにあってどう入手すればいいのか。大蔵省にはないし、交渉相手のアメリカ財務省に聞くわけにもいかないし。



IMFビル（右）と世銀ビル（左；ワシントンDC）

正解はIMFなんですね。IMFにはこの種の情報がどっさりある。国際金融局長のIMF担当課を通してデータ・情報を入手し、それを佐藤次長室に持ち込んで、連日連夜、データの解析とG5会議の対処方針の作成が続きました。

もう一つ私には大きな仕事がありました。それは日本の資金支援を国際的に約束するには、国際金融局長の権限だけでは不十分で、国の予算や財政投融资を担当する大蔵省主計局、理財局などの部局の了解、場合によっては大臣の了解を得て、国際会議の場で日本としてYes・Noを言える権限（マנדート）をもらわないといけないからです。これらの部局への説明と折衝も大変骨の折れる仕事でした。なぜ、ブラジルのデフォルトを食い止めることが日本の利益になるのかをペーパーにして、連日連夜通いつめました（結果は関係部局の完全な了解を得られないまま、ニューヨーク出張となりました）。

G5の会議が開かれたのは、ニューヨーク連銀（アメリカ中央銀行のニューヨーク本部のようなもの）の建物でした。前日ドイツやイギリスの代表と打ち合わせをして会議に臨みました。会場に入ると、メインテーブルに6つの椅子が用意されています。おやっと思って見ていると、議長を務めるアメリカ財務省の次官補の横に座って、しきりに打ち合わせをしている人がいます。そして会議では、この人が、ブラジルの経済状況、対外収支、今後の資金繰りの見通しなど肝心なところをすべて説明し終始中心的な役割を果たすことになりました。この人の正体はIMFの為替貿易局長でした。IMFの政策全般を担当する局長です。このIMF局長の説明ぶりのすごさは半端ではありませんでした。ブラジル国家破産の経緯・背景を巧みに語る様はもちろんのこと、情報・データの掘り下げのレベルがすごい。「IMFはすごいぞ」とは聞いていましたが、こういうことなんだとわかった気がしました。

会議は3時間程続きましたが、G5による救済の効果を疑問視する意見が大勢を占め、G5が資金援助を行ってもブラジル問題の根本的解決は望めないのがブラジル政府にはIMFに立寄ってもらうしかないだろう、という結論になりました。

果たしてこの後、ブラジルはG5会議の筋書き通りIMFの融資を受けながら国家破産の処理をしていくことに

なります。そして、私はこのブラジル問題にどっぷりと関わることになりました。沢山のことがありましたが、一番印象に残っているのは、ブラジルからこの債務問題を担当している大臣（「企画大臣」という人で、ブラジル政府の実力者と評されている人でした。）が来日して日本の関係各省と協議する場でスピーチをした時のことです。なんとその大臣は、「今回ブラジルが窮地に陥ったのはブラジルの責任ではなく貸し手の責任である」ということをとうとうとしゃべり続けたのです。だいぶ後になって、当時のブラジルは、非常な社会主義的プロパガンダとポピュリズムの高揚期にあったということを知りましたが、その時は、この大臣の一方向的なスピーチを聞きながら、「人から借りたものは返さないといけない」という基本を守らない人が主要大臣をやっているブラジルの、破綻の理由がわかったような気がしたのを覚えています。

アジア開発銀行（ADB）へ

1984年5月の連休のころ、訳あって急遽マニラに本部があるアジア開発銀行（ADB）の総裁補佐官の採用試験を受けることになりました。とんとん拍子に話が進み、6月10日にはマニラに赴任するという急展開になりました。5月末まで投資第三課の仕事からは解放されませんでしたので、マニラへの引っ越しの準備とで強烈に忙しい5月となりました。

まだ引っ越しの荷物も届かないうちの6月17日、総裁と総裁夫人に随行し、シンガポール、ニュージーランドへのADB総裁公式訪問に出発しました。ADBのことをろくにどこか何とも知らない私にとってこの初めての海外出張は悲惨なものでした。ニュージーランドでは、ADB総裁の公式訪問は準国賓待遇です。首相や関係大臣との会談はもちろんのこと、議会で総裁が招待され、議会内の格式ある部屋で関係大臣が出席しての総裁スピーチといった行事もありました。ADBからの出席者は総裁とニュージーランド代表理事と私だけです。同じテーブルに座っていた大臣達から私にもバンバン質問が飛んできます。「ADBの最近のASEAN向けのレンディングはどうか」「インドネシアへのツー・ステップ・ローンの成果は」等々。死ぬ思いをしました。

ADBは、今でこそ、最近AIIBという中国主導の国際開発機関が華々しくデビューした関係で話題になったり、2013年に日銀総裁になられた黒田総裁の前職がアジア開発銀行総裁であったということもあって知名度は上がっていますが、1984年当時は日本でもほとんど知る人はいませんでした。1966年に当時のECAFE、今のESCAP（国連アジア太平洋経済社会委員会：本部バンコク）を母体として設立された国際開発金融機関で、アジア太平洋地域の発展途上国の開発を支援するために世界各国が資金を拠出して運営しています。

よく、どうして本部がマニラにあるのかという質問を受けますが、1966年の設立時、本部をどの国がホストするかというのを希望国が立候補して投票できめたのですが、3回目の決選投票で日本はフィリピンに1票差で負けてしまったんですね。当時の佐藤総理をはじめ政府の関係者は大変ショックを受けたと伝えられています。決選投票前夜、投票が行われたマニラでは、フィリピン政府が各国の代表団をマニラ湾周遊の盛大な晩餐会に連れ出すなどの大選挙活動を展開したそうです。

現在ADBは、加盟国67か国、職員数3,000人、年間融資額140億ドル程度の銀行ですが、84年当時は加盟国45か国、職員数1,000人程度で、銀行の幹部も、総裁と3人の副総裁、その配下に局長が十数人といったこじんまりとしたものでした。総裁と3人の副総裁の経営陣をサポートする専門スタッフは私一人でした。あとはフィリピン人の女性秘書がそれぞれの部屋に2人ずつ居るだけです。総裁補佐官の重要な仕事の一つは、総裁に随行して各加盟国を訪問し、総裁が各国の大統領・首相・財務大臣などのリーダーたちと面談し、各国の経済や開発の問題について協議、意見交換するのをサポートすることです。当時はパソコンもメールもない時代ですので、全部手書きでテイクノートし、重要事項は、必要に応じて、出張先から本部の副総裁や局長にいちいち電話連絡していました。今から思えばすべてが素朴でしたが、とにかく忙しかった。

（『グローバルキャリアのすすめ～プロフェッショナル講義から抜粋・編集』）

引用文献

小西尚実編『グローバルキャリアのすすめ～プロフェッショナル講義～』関西学院大学出版会、2018。



ADB本部前でゼミ生と

2018年3月

編集：関西学院大学総合政策学部・関西学院千里国際高等部